

故人と過ごす 遺体ホテル



死者とその家族が火葬までの間、「最後の時間」を過ごせるようにと大阪市北区に5年前にできた「遺体ホテル」の利用が増えている。件数は月に30件ほどで、利用者の反応もいいという。背景には超高齢化社会の到来に伴う「多死社会」を迎え、火葬が追いつかない「火葬渋滞」が発生しつつある現状があるという。従来型の葬儀会社任せの葬送の在り方を見直す動きにもなりそうだ。

(細田裕也)

遺族のペースで見送りたい…

従来型に抵抗感？

阪急中津駅（大阪市北区）から徒歩5分。工場やマンションが点在する一帯に、遺体ホテルと呼ばれる「ご安置ホテル リレーション」がある。外見はビジネスホテルで、築30年以上のホテルをリニューアルし、平成24年3月にオープンした。

6階建てで1階のロビーにはスタッフが24時間常駐。2階に10〜15人を収容でき、通夜・葬儀を行う式場、3〜5階は遺体の安置室や家族が寝泊まりできる控室がある。遺体を納めるカプセルは、ドライアイス不要ながら十分な保冷効果があり、控室にはバス・トイレも完備。故人との「最後の時間」を自分たちのペースで過ごすことができる。

一般的に病院で亡くなれば、依頼した葬儀会社を通し、通夜や葬儀、火葬の段取りが組まれる。ホテルの運営会社の栗栖喜寛社長



遺体を安置するカプセル。特殊な技術を用い、ドライアイスなしでの保冷が可能だ—大阪市北区

超高齢化社会 火葬追いつかず

（54は、従来のやり方では家族が葬儀会社のペースや事情に巻き込まれがちだと指摘した上で、「どんな送り方が最もふさわしいのか、家族が立ち止まって考える場を提供したかった」とホテル開設の意義を強調する。

月30件前後利用

火葬までの間の安置を行う、同様のホテルはすでに東京に複数あるといい、今後も都市部を中心に需要を伸ばすとみられている。背景にあるのは、通常より割安な葬儀プランを提供していること、「火葬渋滞」の発生で「死者の見送り方」を見直す家族が増えていることがある。

26年の日本消費者協会の調査によると、通夜などを含めた葬儀費用は平均で約188万円かかる。

一方、リレーションでは、安置室の利用料は24時間で3万円（税抜き）。さらに、通夜・葬式を行わず、安置と火葬のみの「火

葬式」と呼ばれるプランが18万5千円（同）、通夜・葬儀も伴う「家族葬」でも45万円（同）。参列者が少なく、人件費に加え、祭壇費や花代が抑えられるため、通常の場合より割安になる。1カ月の利用は30件前後で、利用者の7割が価格の安い火葬式を選ぶ。国立社会保障・人口問題研究所の推計では、年間の死者数は13年後の2030年に160万人台に達し、39、40年にはピークの約166万9千人となる。

しかし年々増加する死者に対し、都市部では火葬が追いついておらず、一般社団法人火葬研（東京）の武田至・代表理事によると、首都圏の火葬場では火葬まで1週間かかるケースもある。関西でも「遺体滞留時代」は想定されており、5つの火葬場（計72炉）がある大阪市では最長でも2日以内には火葬されるが、将来的な利用者増を見越し、火葬時間の延長などを検討しているという。

減少する火葬場

火葬研によると、大正時代に全国で約3万7千あったとされる火葬場の施設数は現在、約1500に減少。集落単位で所有していた小規模の火葬場が廃止され、平成の大合併の影響で町村単位の公営火葬場も統合されたためだ。

火葬事情をめぐっては、手狭な都市部の住宅事情から自宅で遺体を安置できなかったり、家族が通夜・葬儀に集まるのが難しかったりするケースもある。多死社会の到来を見据え、遺体ホテルのように、納得できる「見送り方」を、家族で今以上に話し合う時代が到来したともいえそうだ。



「ご安置ホテル リレーション」にある家族用の控室—大阪市北区